

in experiencing, on a regular base, the dominant state of parasympathetic nervous system due to PMR focusing on the breathing exercise and the sense of self-accomplishment in continuing the habit through the long-term intervention are considered to be an effective element for maintaining a stable blood-sugar level. We consider it important to recognize the way of thinking obtained from the patient's own experiences, while appreciating the importance of psychological problems in the treatment of diabetes. Under the guidance and close cooperation with physicians in the outpatient department, it can be said that the patient succeeded in receiving the continuous outpatient treatment.

18. クロステストにおける WISH 型股関節装具の効果

佐藤 江奈,^{1,2} 山路 雄彦,² 佐藤 貴久³
渡辺 秀臣²

- (1) 社会保険群馬中央総合病院リハビリテーション科)
- (2) 群馬大院・保・リハビリテーション学)
- (3) 群馬大医・附属病院・整形外科)

【目的】変形性股関節症(変股症)に対する装具療法として WISH 型股関節装具(WISH 型股装具)を作製した。股関節は姿勢調節に関与していると報告がある。今回 WISH 型股装具の効果の検討を目的に、WISH 型股装具装着における重心動揺の変化について、支持基底面を固定した状況における随意運動中のバランス機能検査であるクロステストについて検討した。【方法】2007年4月～2010年10月に変股症により、群馬大学医学部附属病院整形外科を外来受診した女性患者19名を対象としクロステストを施行した。クロステストは、Ishikawaらの方法に従って、重心動揺計(アニマ社 GRAVICORDER G-6100)上に両側踵部中心間距離を15cm開脚し、約4秒間の安静立位の後、前後右左の順で身体の重心を随意的に各方向に最大に移動させ、最後に約4秒間の安静立位をとり、サンプリング周期20msにて40秒間計測した。左右(X)方向と前後(Y)方向におけるそれぞれの最大振幅(XD, YD)を求めた。XD, YDそれぞれについて、装具の着脱における変化について Wilcoxon の符号付順位和検定を用い、装具装着後の経過について Mann Whitney の U 検定を用い、危険率5%未満を有意差ありとした。【結果】XDにおいて装具装着による有意な変化が認められた。YDは有意な変化はみられなかった。装具装着後の経過においては、装具装着における有意な変化はみられなかった。【考察】左右方向への重心移動において有意な変化を認めた。内外側方向の安定性を回復するためには股関節が主要な関節である。

WISH 型股装具は、左右方向のバランス機能の改善に有効であると考えられる。

19. 乳頭腫脹と虹彩毛様体炎を合併した成人発症 Still 病の一例

野田 聡実, 岸 章治

(群馬大医・附属病院・眼科)

【緒言】成人発症 Still 病(AOSD)は、若年性特発性関節炎の全身発症型(Still 病)が16歳以上の成人に認められたものである。眼合併症を生じることはまれであり、その報告は少ない。今回我々は両眼性の虹彩毛様体炎と高度な視神経乳頭腫脹を合併した症例を経験し、その経過を観察したので報告する。【症例】16歳女性、近医で発熱、発疹等により川崎病として加療されるも改善なく2009年4月30日当院内科へ精査加療目的で転院となった。精査の結果、AOSDと診断されステロイド治療が始まった。結膜充血があり内科からの紹介で2009年5月1日当科初診。矯正視力は両眼とも(1.2)、眼圧は右13、左11mmHg、両眼に虹彩毛様体炎と高度の視神経乳頭腫脹を生じていた。視力・視野障害などの訴えはなかった。ステロイド点眼で虹彩炎は改善、メソトレキサート併用後全身状態の安定化に伴い乳頭腫脹も徐々に改善していった。経過中、視力視野障害はなく、神経線維束欠損なども生じなかった。乳頭所見の経過観察には光干渉断層計OCTのdisc cube測定と眼底写真を用いた。【考按】AOSDで眼合併症を生じることは多くないが、軽度の充血のみで自覚症状が特になくても高度の視神経乳頭腫脹や虹彩毛様体炎を生じることがあり、一度眼科で検査をすることが望ましいと考える。また、乳頭所見の変化をみるのにOCTは有用であった。

20. 手根管症候群患者における超音波診断の有用性と臨床所見の関連について

田鹿 毅, 小林 勉, 山本 敦史

金子 哲也, 澁澤 一行, 高岸 憲二

(群馬大医・附属病院・整形外科)

【はじめに】手根管症候群(以下CTS)診断における超音波の有用性を調査し、CTS患者超音波像と臨床所見(Quick DASH機能、症状スコア)、電気生理学所見(短母指外転筋複合活動電位(CMAP)、示指感覚神経活動電位(SANP))との相関を調査し検討したので報告する。【対象と方法】コントロール群は男性18人33手、女性35人63手、合計53人96手、平均年齢52.6歳(22歳～86歳)を調査した。CTS群は男性7人10手、女性20人31手、合計27人41手、平均年齢58.7歳(30歳～85歳)を調査した。超音波検査は①wrist crease高位②遠位橈尺関節高位にてエコー短軸像を検査し正中神経断面積を測定